

## 紀要 39 号の刊行に当たり

2011 年は掛け値なしに激動の年であった。

海外を見れば、大きなうねりがアラブ世界で起きた。チュニジアの「ジャスミン革命」をきっかけに、北アフリカ、中東で燃え上がった民衆の反政府運動である。長年、この地域を支配してきた独裁政権が音を立てるように崩れ、その余波はアジアなどの新興国にも広く及んだ。

経済のグローバル化を背景に、権利意識に目覚めた民衆の決起を助けたのが、インターネットを通じて形成された自発的連携であったのは言うまでもない。資本主義の急速な膨張と、IT 革命の同時進行が世界の構造を大きく変えようとしている。

日本では、あの 3・11 があった。自然のもつ途方もない破壊力、そして人間が解き放ってしまった魔力 = 原子の力が同時に東日本を襲った大厄災である。未曾有の国難に、日本はいまも確かな未来図を描けず身もだえしている。

当研究所は、大阪狭山市の SAYAKA ホールと共催する 2011 年国際理解公開講座で前・後期を通じ、これら内外の「激動」に焦点を当て、その歴史的意味を考える連続講演を開催した。

ここで見逃せないのが、地域から参加した聴衆の存在である。各回、参加者からは質問が相次ぎ、演者との応答は白熱したものになった。討議を通じ、地域住民の皆さんもまた激動の現代史に積極的に参画していた、と見るべきではないか。

この紀要 39 号は、一連の公開講座での講演、質疑応答を可能な限り忠実に採録した。南大阪の地で研究者と住民が一体化し、日本、そして世界を見つめた「現場」の熱気を、少しでも多くの人に共有してほしい、と願ったからである。

2013 年 3 月

前国際理解研究所

所 長 中 川 謙